
バカと少年とドタバタ生活

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと少年とドタバタ生活

【NZコード】

N4289Y

【作者名】

S

【あらすじ】

二人の少年が居た。

一人は嘗ての自分を殺し生きている少年『吉井明久』。

もう一人は明久が嘗ての自分を殺す原因になった一つ『桐岡 隼人』。

二人は許し合うことができるのか？

二人の物語が今、始まる。

追伸 タイトルがどうも合っていないような気がしますが気にしないでください。それともし、何か新しいタイトル候補があつたらコ

メントください。

ぶるるーぐ（前書き）

やつてしまつた……

つい、知り合いに『バカテスの一次創作も書け』と言われて書いてしまつた……

既に『tina mi』の方も合わせ八個も作品を投稿しているのに……

八個も投稿しているので不定期になります。

それに計画性はまったくありません。

今から一人の過去を考えている位です。

それでも『バツチ「トイ!」』と言つなら応援よろしくお願ひします。

ぶるるーぐ

「吉井明久……」

俺を裏切りそして俺が裏切った男……
だから俺はあいつに嫌われている……
しょうがないんだ……

「でも……」

俺はあいつを嫌って無い。
もう許している……

だから……許してほしい……

「教えてくれ…… 明久」

お前はどうしたら俺を許してくれるんだ?
死ねと言つんなら死ぬ。
だから許してほしい……

お前を裏切ったことを……許してくれ……
俺はそんなことを思いながらゆつくりと歩き出しこ
大勢の人混みの中に溶けて行つた。

明久 side

懐かしい夢を見ていた様な気がする。

そつ……あれは……『俺』が死んだ時の記憶だ。

『俺』はあの時死んで『僕』になつたんだ。

あいつが『俺』を裏切つて『俺』があいつを裏切つた。

だから、『僕』はあいつに嫌われている……

「教えてくれよ…… ビーヴィーたら『俺』を許してくれるんだ？」

お前はビーヴィーたら『俺』を許してくれるんだ?
死ねと言つとなら死ぬ。

だから許してほしい……

お前を裏切つたことを…… 許してくれ……

『僕』はそんなことを思ひながらゆうべつと田を睨つた。

ぶるるーぐ（後書き）

今日はこれとキャラクター紹介を投稿します。
これからよろしく願いします。
では、また次回。

キャラクター紹介（と言つてもオリジと明久の一人だけ）

『桐岡隼人』

本作品の主人公。

正確はクールだが実は優しい。

髪の色は黒髪。

自分自身の強さとしてはFFF団と戦つても余裕で勝てて鉄人と良い勝負ができる。

召喚獣を使えば鉄人さえ余裕で倒せる。

召喚獣の服装は完全黒で刀とマシンガンと500点を消費して撃てるロケットランチャー。

因みにマシンガンは一回の召喚で百発しか撃てない。

因みに祖父が学園長の知り合いで隼人は召喚獣のデータ採取の為いつも召喚獣を扱っていた。

データ採取の際に特殊なテストを受けていて点数がリセットされない。（明久も同様）

試験召喚実習の授業は適当な理由をつけて全て休んでいた。

理系に関してはスーパーコンピューターが十年かかると言われた計

算を五時間で終わらせた。

他の教科でも天才で勉強しないでも全教科600点以上は取れるが組み分けテストの時に気分が悪く欠席した。

『吉井明久』

本作品のもう一人の主人公。

相当優しいが自分のこととなると超鈍感。

嘗て自分を『俺』と言つていてた。

隼人並に天才だったがあることが切欠でその時の自分を『殺した』

隼人と同じくらい喧嘩が強いが本気は余程のことが無い限り出さない。

瞬間記憶能力者の為記憶教科では隼人に『記憶教科で明久に敵う奴は居ない』と言わせる程。

一年生の頃学校では滅多にその才能を見せなかつたが一年生になりその才能を最大活用することにした。

召喚獣の姿は原作と同じく学ランだが武器は刀になつている。

隼人同様一年生の頃の試験召喚実習の授業は全て出なかつた。

一話 クラス振り分けテスト（前書き）

こんにちわ～
何だか書きたくなつて書きました。
後悔はしません。
では、始まり～

一話 クラス振り分けテスト

僕はクラス振り分け試験を受けている。思つていたよりも簡単でびっくりした。これならCクラス位にはなれる筈だ。

そんなことを思いながらシャーペンを走らせてみると

ガタンッ！

そんな音がして何事かと思つて音のした方を向くと姫路さんが倒れていった。

「姫路さん…？」

僕は試験中であるにも関わらず姫路さんに近寄つた。そして姫路さんを抱き寄せて頭に手を乗せて体温を計る。

「暑い……」

熱がある。

四十度近くはある筈だ。

「保健室に連れていかないと……」

そう呟いて僕は姫路さんをおぶりつとするが

「試験途中での退室は無得点扱いとなるがそれでも良いかね？」

そんな監督官のセリフで止められた。

「具合が悪くなつてそれは無いだらう……！」

「具合が悪くなつてそれは無いだらう……！」

僕はもうキレた。

僕はその監督官に掘みかかつた。

監督官は表情を変えてこう言い放つた。

「規則だ、仕方ないだらう」

……はつ。

そう言つことかよ。

何でも規則が大事つてか……

くだらねえ……

「姫路、今から保健室に連れて行くから少し耐えろよ」

僕は監督官を無視して姫路さんを背負つ。

すると

「あき……ひさ、くん、駄目です。

それだと明久君が……」

苦しそうに姫路さんはそう言つて來た。

もつ恋れられてたと思つてたけど覚えてたのか……

「良いよ、その位。大したことじやないから

そつ言つて試験会場の出口に向かつ。

すると

「もう一度警告する。席に戻れ」

監督官が席に戻る様に言って来た。

この試験管、ホント殴つても良いんじやないか？

そう思うが殴ると問題になつて姫路が悲しむから口だけにするか。

「黙つてろ、この人形が」

そう一言言つ放つて僕は試験会場から出た。

一話 クラス振り分けテストの結果

「お前達、遅刻だぞ」

校門の前でそう言って来たのは通称鉄人。趣味がトライアスロンの化け物。

「お前、今失礼なことを思わなかつたか?」

「いえ、別に」

おまけに人の心を読めるときた。本当に化け物だらう。

「まあ、良い。受け取れ」

鉄人はそう言つて封筒を渡していく。

まあ、別に中身は見ても分かるんだけどね。

「吉井、お前残念だつたな」

「別に良いですよ。あんな下衆が居る学校で頭を良くする氣なんてなくします」

僕はそう言いながら封筒を開ける。

そこには『吉井明久 Fクラス』と書いてあつた。

僕はそれを見て鉄人に向かつてこう言つた。

「あなたが学園長だつたらまだ我慢できましたけどね

「吉井……」

この人の熱意は本物だ。

多分学園長のババアにも抗議をした筈だ。

でも、学園長はそれを一蹴しただろう。

僕はそんなこと思いながらFクラスの教室へと向かった。

Fクラス教室

僕達はFクラスの教室に来たんだけど僕は困惑している。
何故かと言つとFクラスの設備が原因だ。

今、僕達はこの教室に着いたばかりで少し見ただけだけどここ木
ントに学校?

つて思つくりらいひどい。

窓ガラスは割れて黒板もボコボコ。

椅子も無い。

これは本当にひど過ぎる。

それに……

「おー、さつさと入れ

何で雄一がここに居るんだ?

『元』神童の筈なのに。

「今、すげく失礼なことを思われた様な気がするけど気にしないで

おこづ。

早く入れ

「……雄一、何やつてるの？」

多分、雄一がこのクラスの代表なんだろ？
何たつて『元』神童だからな。

「俺がこのクラスの代表だ」

「……やつぱりか」

まあ、何でも良いや。

そんなことを思つていると先生らしき人が教室に入つて來た。

「取りあえず座つてください」

僕達はそう言われて席に着いた。

「一年F組の福原慎です。よろしくお願ひします」

福原先生は黒板に名前を書い立てるが、チョークすら用意されてなかつたからやめた。

申し出てください

最悪の設備だ……

これが最悪のクラスの不遇か……

「先生！俺の座布団綿があんまり入つません！」

「我慢してください」

代え位用意しようよ……

「では先生！」では自己紹介を始めましょう』え？無視ですか？」

すると、教室の扉が開いた。

どうやら遅刻者が居たらしい。

遅刻者は二人らしい。

俺はその二人の顔を見て驚いた。

一人はAクラスでも上位に入っているだろう少女。

『姫路瑞希』

クラス全員が何で彼女がここに居るか理解できないだろう。だが、真に僕が理解できていないのはもう一人の方。嘗て彼に逆らう奴は一人残らず体をズタズタにされ全世界の裏社会の人間から恐れられた『鬼神』

「桐岡隼人……！」

何で奴がここに……！

嘗て僕を……いや『俺』を裏切り『俺』が裏切った男。

そんなことを考えているとあいつは『俺』を見てそして驚いた顔をした。

「…………！」

口が動いて何か言つていたが聞こえなかつた。でも、何を言つているかは分かつた。

『吉井明久…………！』

「Jの言つたんだろう。

これからどうなるんだ……」Jの学園生活は……

隼人 side

「吉井明久……！」

何で奴がここに居る！？
奴の学習能力ならばAクラスなんて余裕でなれた筈だ。
なのに何故……なのに何故だ！？

「二人共、自己紹介をしてください」

担任らしい人がそう言つと隣にいた女子が自己紹介を始める。

「姫路瑞希です。

よろしくお願ひします」

小柄な体を更に縮こめるようにして姫路と名乗った少女はそう名乗つた。

まるで何処かのお姫様の様だ。
すると生徒の一人が手を上げた。

「質問です！どうしてここに居るんですか？」

普通に考えればクラス振り分けテストでそう言つ成績を取つたと言うのが答えだらう。

だが、どうやらこの女子は相当優秀らしい。

「テストの時に高熱を出してしまって……」

身体が弱いらしい。

それでのクソババアがFクラスに落としたと言う訳か。
しうがないと言えばしうがないだろう。

「では、桐岡君、自己紹介をお願いします」

「桐岡隼人。

趣味は特はない。

試験の時に体調不良の為休んだ。

それだけだ」

俺が名乗ると生徒が騒ぎ出す。

『おい、確か桐岡隼人つて……』

『ああ、かつて仲間をボコボコにされた恨みで一つのマフィアをぶつ潰した男だつて聞いたぜ』

『俺は全世界の裏社会から恐れられてるって聞いたぞー。』

『何でそんな奴が……』

どうやら噂は尾を引いているらしい。

俺はそこまで怖くない。

それにマフィアじゃなくてアメリカの暴走族の間違いだ。

「では、一人共席に着いてください」

そつ言われて適当に席に着く。
すると自己紹介が再開された。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

あいつ女か？

それとも男か？

良く分からん。

「……土屋康太」

結構物静かだな。

「島田美波です。

趣味は吉井を殴ることです」

おいおい……明久も随分厄介な奴に狙われたな……

「吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでください」

『『『ダーリィイイイイツン…』』』

明久は遂にそつち系の奴等に狙われたか……
そんなことを思つていると赤毛の男が立つた。
『うやらあいつが最後らしい。

「坂本雄一だ。よろしく頼む」

それだけで終わったと思ったが終わりでは無いらしい。

坂本はこう続けた。

「お前等、この教室の設備を見ろ」

そう言われて生徒全員が設備を見る。
これが設備なのか疑わしいところだ。

「この設備に不満は無いか?」

『『『大ありじやああああつ……』』』

魂の叫びだな。

一瞬割れない窓が揺れたぞ。

「これは代表としての提案だが……」

そこで一端きり野性味満点の笑みを見せ坂本はこう言った。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよつと思つ

これから一年F組としての俺のドタバタ学園生活が始まった。

二話 勝てる根拠

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ

坂本がAクラスへの宣戦布告をするとクラス中から悲鳴が上がる。

『勝てる訳が無い』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんが居たら何も要らない』

そんな既に勝負を諦めている悲鳴。

悲鳴を上げていなのは宣戦布告をした坂本だけだ。
確かにAクラスに対し俺達Fクラスが試験召喚戦争を仕掛ける等愚
かな行為だ。

だが、俺は坂本の目に確かな自信がある様に見えた。

「勿論、勝てる要素はある。

おい、康太。畠に顔を付けて姫路のスカートを覗くな

「……！（ブンブン）」

変態かあいつは。

「は、はわっ」

姫路はスカートの裾を押さえて遠ざかった。

すると土屋は顔に付いた畠の後を隠しながら檀上へと歩き出した。

「土屋康太。こいつがあの寡黙なる性識者だ」^{ムツリーニ}

聞いたことがある。

保健体育では異常な点数を取りその名は男子から畏怖と敬畏を、女子からは軽蔑を以つて上げられる伝説の男。

「姫路のことは説明する必要も無いだろ?」

確かに……入学して最初のテストで一位を記録したって云つ奴だよな? 因みにその時俺は面倒だったから本気を出さなかつた……

「木下秀吉だつて居る」

あいつのこととも聞いたことあるな。

姉のこととか演劇部のホープだとか。

「当然俺も全力を尽くす」

確か小学生の頃坂本雄一とか云つ奴は神童だつて良く父親が云つてたな。

あいつが……

気が付くとクラスの士気は上がつていた。

「それに、吉井明久だつている」

そして一瞬で下がつた。

あいつ……この学校で本気を出していしないんだな。

「何で僕の名前を出したのさー。云つとくけどそこまで興味無さそうこ

しての鬼神桐岡隼人の頭脳は

スーパーコンピューター以上だからね!」

明久がそう言つた瞬間教室内の視線が一気に俺に集まつた。

『明久め……余計なことを……

ちょっと仕返ししてやるか……』

「瞬間記憶能力者が言つた……」

俺がそう言つた瞬間一気に教室内の視線が明久に集まつた。ザマ見る。

『てか、明久と桐岡つて知り合いだつたのか?』

『明久が瞬間記憶能力者だつたら何で成績が悪いんだ?』

『スーパーコンピューター以上とかすごいな』

そんな声が上がつているが今は無視で良いだろう。話も後で聞ける筈だ。

そう思つて俺は傍観することにした。

「さて、予想外のことが色々あつたが明久にしてもうつ

「ねえ、下位クラスの使者つて大体酷い目に遭うよね?」

確かにその通りだらう。

坂本の今の言葉は処刑宣告に等しい筈だ。

「安心しろ明久、そんなの小説や映画の中だ。

それにお前は強いんだから大丈夫だ」

勉強の方は本気は出して無かつたが喧嘩での本気は出したのか。あいつは一年の頃どんな学園生活を送っていたんだ?

「しょうがないな……分かつたよ」

明久はそう言って頭を搔きながら教室から出た。
それを見て俺も自分の席から立ち上がる。

「おい、桐岡。どこに行くんだ？」

坂本に呼び止められ俺は坂本の方を向いてこいつ答えた。

「明久が心配だからな。

俺も着いて行つてやるのとと思つただけだ」

俺はそう返事をして教室が出た。

四話 試験召喚戦争の始まり

今俺と明久はDクラスの教室へと向かっている。
こいつに着いてきた理由は島田が心配していたのもある。
だが、着いてきた一番の理由はそれじゃない。
一番の理由は話がしたかつからだ。

「何でお前はFクラスに居るんだ？」

それが一番気になっていたことだ。
こいつは本気を出せばAクラスになど余裕で行けた筈。
それどころか学年主席も夢じやない。
なのに何故Fクラスに居るのか。
俺は不思議だつた。

「僕は嘗ての『俺』を殺したんだよ」

成程な……だからこいつは……

「で？お前、彼女は出来たか？」

「な！？なななななな、何を言つんだ！？」

「まだか」

昔はナンパを良くしていった癖に。
今は奥手になつたんだな。

「何かいらっしゃんけど？」

「知らん、それより開くぞ」

取りあえず明久は置いといて俺達に課せられた使命を達成することに集中することにした。そして、俺はDクラスの教室の扉を開けた。

「失礼する」

「失礼します！」

どうやら明久は復活したらしい。

Dクラス全員が俺達の登場に驚いている。

「な、何だてめえら！」

一人の男子が俺達に向かつて怒鳴る。

俺達の迫力に押されているのか声が震えている。

「僕達FクラスはDクラスに午後に試合戦争を仕掛けます！」

明久がそう言つた瞬間少しの沈黙がその場に流れ

「「「生意氣よ（だ）…」」

そんな怒鳴り声がその場に鳴り響いた。

俺と明久は廊下に飛び出た。

流石に学園で問題を起こすのは不味いからだ。

「こんなの久しぶりだよね！」

明久は逃げながらも笑いながらそう言つて来た。

「そうだな、少し楽しいな」

俺達は楽しそうにFクラスへと向かう。
そしてFクラスの前になつて明久は扉を開け放つ。
それを見て俺は明久の首を掴み後ろに投げ先に入る。
そして、明久の方を向きこう言つた。

「俺の勝ちだぞ、明久」

俺がそう言つと明久は立つて悔しそうな顔をする。

「最後のは卑怯だつて……！」

「お前が全て読み切れなかつたのが悪いんだ」

俺はそう言いながら坂本に近づく。

そして俺は拳を固めながらこう言つた。

「坂本、遺言は聞いてやる。

誰かに言いたいことがあつたら俺が伝えてやろう。
何かあるか？」

坂本はその言葉を聞いて顔を蒼くして後ろに下がる。
俺もそれを見て一步前に出る。

「た、助けてくれないか？」

俺はその言葉を聞いて明久の方を向く。

すると明久は頷いた。

俺は携帯をポケットから取り出し坂本の写真を撮つて一言。

「イイオトコ達にこの写真のデータを渡して『』の男は総受けだと伝えておく」

「殺してくれえええええええつ！」

坂本の叫び声がFクラスの教室に鳴り響いた。

明久 side

屋上

雄一が叫んだ後僕達は雄一の作戦を聞く為に屋上に居た。吹いてくる春風が気持ち良い。

「さて、僕達はFクラスに午後に開戦予定だつて言つて来た」

その言葉に島田さんが反応する。

「それってつまり昼食を食べてから開戦つてこと？」

その言葉に隼人が答える。

「やつ言つ」とだ。それより明久、昼飯はちゃんと持つてきたか？」

その問いに僕は親指を立てて答える。

「パンを奢つてくれ」

パンッ！

頭に手刀を食らわされた。

そのやり取りに姫路さんが首を傾げてこいつ尋ねてきた。

「吉井君つてお昼食べないんですか？」

「いや、食べてるよ」

その僕の答えに隼人が横槍を入れてくる。

「お前の主食は砂糖と水と塩だろ？が」

「それだけでも十分さー。」

その僕の答えに灰になつてている雄一以外頭に手を当てて呆れた。
皆どうしたんだろう？

「話が逸れたな。試召戦争の話をしよう。
おい、坂本。灰になつてないで話をしよう」

隼人……それは酷だよ……

「さて、まずここに居る奴等が持つていてる疑問を解決しよう。
まず、何故最初にDクラスを狙うのかだ」

「あ、ああ、まあ、クラスの連中に召喚獣の扱いを慣れさせたいから。

次に打倒△クラスの為に必要なプロセスだと言つ一つの理由だ」

でも、それって……

「でも、□クラスに負けたらお終いじゃない」

そう、□クラスは僕達よりも上のクラスだ。
勝てる確率は少ない。

でも、その島田さんのセリフに雄一は笑つて答えた。

「負ける訳がない。俺達のクラスは最強なんだからな

そのセリフは何も根拠の無いセリフだったけど何故かその気にさせる
不思議なセリフだった。

「作戦を話すぞ、良く聞け」

僕達は春風が吹く屋上で勝利の為の作戦に耳を傾けた。

五話 Dクラス対Fクラス

明久 side

「吉井！渡り廊下で木下達が戦闘に入ったわよ！」

そう言つて島田さんが前線の状況を報告してくれる。
僕は耳を澄ませて前線の状況を探る。

因みに僕は中堅部隊の隊長だ。

『くそ！やはり点数の差がある！』

『押されてるぞ！もつと頑張れ！』

『補習室なんかに行つてたまるか！』

どうやら状況はあまり芳しくないらしい。

そう思つて僕は隼人から渡されたインカムで隼人に連絡を取る。

「隼人、今から僕達は前線の援護に行く。
遠距離から援護してくれ」

『了解、死ぬなよ』

「僕を誰だと思つてるんだ？」

『そつだつたな』

隼人のその言葉を聞いて僕は部隊の方を向いた。こう命令した。

「全員突撃しろ！」

その号令と共に皆全力で戦場に向かう。

すると秀吉が前で戦っていた。

秀吉の表情から戦死寸前だと言つことが分かる。

そんな秀吉が一方向から攻撃を仕掛けられていた。

「隼人！右を頼む！」

「パアアツン！」

僕がインカムで隼人にそう言つた瞬間そんな音が鳴り秀吉の召喚獸を右から攻撃しようとしていた召喚獸に穴が開き戦死した。流石隼人だ。

仲間がいきなり戦死したのを見て左側の召喚獸が戸惑い始める。秀吉までもが戸惑つてチャンスの時に攻撃出来ていない！

「サモン試験召喚！」

僕の声に呼び声に応じて召喚獸が現れる。

僕の召喚獸は一瞬で秀吉の近くの敵の傍に移動し頭を持つて地面に叩きつけ鳩尾を殴る。

すると敵の召喚獸が消えた。

これで一人の敵を補習室に送った。

「吉井！五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴等、化学教師を連れて來たわ！」

見ると確かに一年生化学担当の五十嵐教諭と布施教諭が渡り廊下に居た。

連中、学年主任だけだと時間がかかるから立会人を増やして一気に

勝負を付ける気か！

「島田さん、化学に自信は？」

「全く無し、六十点台常連よ」

「しうがないか……」

島田さんを補習室に送る訳にはいかないし……

「取りあえず、学年主任の所に行こう

「高橋先生の所ね？了解！」

何とか敵に見つからない様に移動する。すると

「あつ、あそこに居るのはFクラスの美波お姉様！五十嵐先生！こつちに来てください！」

「くつー！ぬかつたわ！」

Dクラスの敵が走つてこつちに近づいてくる。このままじゃ島田さんが補習室に送られてしまう。

「島田さん一行つてくれ！僕が何とかするー。」

「何言つてんのー！無理に決まって『つむせえー！やつせと行けー！』ー！」

？」

「俺が負けると思つてんのか！俺は負けねえー！だから行けー！」

「……補習室に行かないでよ。」

そう言つて島田は移動しようとすると、

ふつ……ホントうしくねえ……

「お姉さまー逃がしません！」

そつ言つて島田をお姉さまと呼んでいる女子が島田を追おつとする。
その前に俺は刀を構え立ちふさがる。

「隼人、島田のフォロー頼む」

『了解だ』

「邪魔をする人は殺します！」

そつ言つて女の召喚獣は俺の召喚獣に斬りかかるが……

「遅い……」

がら空きの身体に刀を滑り込ませる。
刀は敵の召喚獣の鳩尾にヒットした。
すると敵の召喚獣は消え去った。

「そ、そんな！ 压倒的すぎますー！」

「見ろよ」

俺は召喚獣の頭上に表示されている点数を指す。

そこにはこう表示されていた。

『Fクラス 吉井明久 VS Dクラス 清水美春
化学 750点 VS DEAD』

「750点! 何でそんな人がFクラスに……！」

「西村先生! よろしくお願ひします!」

俺がそう言つとどこからともなく鉄人が現れた。

「おお、清水か。来い、補習漬けにしてやる」

そう言つて鉄人は清水とか言つ女子は補習室に連れて行つた。

「吉井明久! 覚悟してくださいね!」

色々危険なことが聞こえたが無視しよう。
そんなことを思つていると

『（ピンポンパンボーン）連絡いたします』

ん? 何だ? 須川か?

『船越先生、船越先生』

船越つて数学の……

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

は？

『教師と生徒との垣根を越えた話しがしたいそうですが』

あのクソ野郎！

「隼人、俺は一端抜ける！頼めるか！？」

『一端Fクラスの前線の奴等を伏せさせる。

後はアサルトライフルの状態をセミオートからフルオートにして敵を一掃する』

「了解！Fクラス！一端伏せろ！とんでもない攻撃が来るぞ！」

俺が召喚獣を伏せさせてから少しひつとFクラスの召喚獣と生徒が一度伏せる。
すると

パパパパパパッ！

そんな破裂音共にDクラスの召喚獣に次々と攻撃が当たる。

「おつと、こんな物見てないで須川を死刑にするか。
つてこれじゃ昔の俺は死んだとか隼人に言えないじゃないか」

でもそんなことは関係ねえ。

俺はそんなことを思いながら放送室に向かい須川をボコボコにした。
その後戦況は隼人のおかげでD組はボロボロ。

姫路がD組代表にトドメを刺してこの戦争は俺達の勝ちに終わった。

六話 Dクラス戦闘後

Dクラスとの戦争後、須川をボコボコにした後
僕はDクラスの教室に引き摺つてこい、Dクラスの教室に居た。
雄一はDクラスの代表と話している。

「明久、そんなに怒つてやるな。勝つ為に必要だつたことだ」

隼人はそう言いながら僕の肩に手を置いた。
隼人が言いたいことは分かる。
あの放送は先生達を騙す為の物だ。
その位のことは分かつてる。
でも……！

「相手が船越先生だと言つことと呼び方が問題なんだよー。」

船越先生は婚期を逃してついに、生徒達に単位を盾に交際を迫るようになつた先生だ。
須川をボコボコにした後に船越先生に会いに行つて誤解を必死に解いてい無かつたら
今頃僕の貞操は……！
考えるだけでも恐ろしい……
そんなことを考えているとDクラスの代表と話を終えた雄一が近づいてきた。

「坂本、話は終わつたのか？」

「ああ、上手くいったぜ」

そう言つて雄一は親指を立てた。

恐らく何か交渉していたんだろう。

どんな交渉をしてたんだろう?

僕は気になつて尋ねてみる。

「どんな交渉をしてたの?」

「俺が指示を出したらBクラスの室外機を動かなくてして欲しい」と
言つたんだ

確かスペースの関係で間借りしている物の筈だ。

多分Bクラスとの戦いの作戦で必要になるんだろう。

そんなことを思つていると皆帰る準備を始める。

それを見て僕も帰る準備を始める。

「あの、明久君……」

帰る準備をしていると姫路さんが廊下から声をかけてきた。
僕は呼ばれた通り姫路さんに近づいた。

「どうしたの?」

そう言つと姫路さんは胸ポケットから一枚の折りたたまれた紙を渡して僕に渡して来た。

姫路さんは僕に目で広げる様に催促した。
僕はその通りに紙を広げた。

紙にはこう書かれていた。

『あなたのことが好きです』

見間違いだと思つて僕は田を擦つてもう一度確認する。
そこには間違いなく「」と書かれていた。

『あなたのことが好きです』

これって僕に対して?
いや、ちょっと待てや。

おかしくないか?
何で俺なんかに?

つと、いつの間にか俺口調になつてた。

「これ、本気?」

「はい」

その田を見て嘘をで言つてゐる様な物では無い」とが一瞬で分かつた。

本当なら「」で即答しなくちゃいけないんだろ?など……

「今はまだ答へる」とは出来ない

僕は……俺は首を横に振りながらそう答えた。

「何ですか?他に好きな人が?」

「いや、居ない。

でも、まだ答へる」とは出来ないんだ

俺はまだやらないからいけないことがある。

それをしていないのに誰かと付き合つなんて出来ない。

俺は紙を渡していつ言った。

「まあ、もしかしたらいつか俺の方から告白するかも知れないけど……」「……

「やうですか……でも、私は絶対に諦めませんから」

そう言つて姫路は帰つて行つた。

「告白されたか」

「うわあつー

心臓が止まるかと思つた……

もしかしてこいつは俺を殺したいんじゃないんだらつか……

「そこまで驚くことは無いだろ。人を幽霊みたいに……全く」

「気配が無い所からいきなり声をかけられれば誰でも驚くだろ」が

「それは悪かつたな。
で?告白されたのか?」

「ぐつー。」

話しを逸らそつと思ったの!……!
今更話を逸らしても遅いか……

素直に話す他無いな……

「ああ、告白されたよ」

「そうか。

なら、それだけだ」

隼人はそう言いながら踵を返して去つて行つた。
ホント……言わなくとも心の内を分かつてくれる友達つて居ると嬉しいもんだな……

「さて！明日も頑張るー！」

僕はそり泣いて家路についた。

七話 Bクラス戦（前編）

Dクラス戦の翌日僕達はBクラスを相手に試験召喚戦争をしている。最初は隼人がBクラスの前線にマシンガンを撃つてたけど一日に百発しか撃てないから弾切れを起こした為今は接近戦闘を行つてゐる。僕や隼人は圧倒的にBクラスよりも点数が高いけど周りの仲間はBクラスよりも圧倒的に点数が低いから次々に補習室堵問室に送られている。

「明久！ここは一端引いた方が良い！何故だか分からぬが総司令塔の姫路から指示が来ない！」

「ここは回復試験を行つた方が良い！」

「分かつた！殿は僕がやる！教科選択をやってくれ！」

『サブジェクトセレクト
教科選択』

隼人が持つてゐる『光の腕輪』の能力。ランダムで一つの教科の点数を半分にする代わりにファイールドの教科を自由に選べる。

「分かつた！教科は？」

「日本史で！」

『サブジェクトセレクトジャパニーズヒストリー
任せろ！教科選択！日本史！』

隼人がワードを言つとファイールドが日本史に変わった。

「明久！」

隼人は腕輪を僕に投げ渡すと撤退していく。
Fクラスの皆も撤退していく。

『敵は吉井一人だ！一人だけだつたら俺達にも勝ち目はあるー。』
『一斉攻撃だ！』
『やれええええつ！』

Bクラスの生徒が僕の召喚獣に襲い掛つて来る。

さて、突然だが僕が日本史を選んだ理由を説明しよう。
この学校のテストの教科は現文、古文、数学、日本史、世界史、化
学、物理、生物、保健体育の九教科。
僕が普通に試験を受けると総合教科で約800点。

一番高い点数は日本史だ。

勿論それだけでは僕だけで殿はやらない。
僕だけでやつた理由は勿論ある。

その理由は日本史の点数だ。

その点数とは

『Fクラス 吉井明久
日本史 2000点』

『な、な、な、何だつてえええええつ！？』『』

そう言つこと。

僕は日本史が圧倒的に他の教科よりも高い。
だからこそ僕は殿を務めたんだ。

「ああ、始めよ！」

遊びをね……

隼人 side

「こんなのは誰が……」

クラスの誰かが呟いた。

もしかしたら俺が呟いたのかもしれない。

何故なら……卓袱台や鉛筆がボロボロになっていたから……

「根本の野郎だ！間違いない！」

確かに根本の奴は勝つ為ならば何でもすると噂で聞いた。
だが根本は今Bクラスの教室に居る筈だ。

こんな真似は出来ない。

他に根本と通じている奴がやつた筈だ。

一体誰が……！分かつた。

「坂本、根本には確か彼女が居たな？C組代表の」

「あ？ああ、でも、それが……あ！」

「やられたな……」

その彼女を使ってC組の奴等に根本が指示をしたんだりつ。
何て外道な奴等だ……！

良いことを思いついたぜ。

「木下、お前にはAクラスの姉貴が居たな？」

「む？ それがどうかしたかの？」

「坂本、女物の制服を調達しろ」

「は？ そんな物……成程」

坂本も俺の考えに気が付いたのかニヤリと笑った。

さて、CクラスとBクラスには敗北の屈辱をくれてやるつ……

Cクラス前

俺達はCクラス前の廊下に居た。
作戦としては木下にAクラスの姉貴の演義をさせてAクラスにCクラスをぶつけて
Cクラスにこれ以上馬鹿な真似をさせないようにするといふことだ。
それで木下が先程入ったのだが……

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

始まったか。

しかし『豚ども』とは……言い過ぎの様な気が……

『アンタ、Aクラスの木下ね？ ちょっと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！ 何の用よ！』

これはCクラスの代表だろうか？

声からして怒っているな。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴方達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なつ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！』

?』

誰もFクラスが豚小屋とは言つて無いだらつ……
実際豚小屋並に汚いが……

『ちょうど試合戦争の準備もしているようだし、覚悟してなさい。
近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるからー。』

そう言つて木下が教室から出て來た。

『皆ー Aクラス戦の準備を始めるわよー。』

良し、ひかかつたか。
木下も中々やる。

「良し、お前等戻るぞ」

その言葉にその場に居た全員が頷いた。

さて……一気にBクラスとの決着を付けるかな……

俺は気付かぬ内に口の端を吊り上げた。

七話　Bクラス戦（前編）（後書き）

11 / 24

隼人の腕輪の名前を付け加えました。

八話 Bクラス戦（中編）

僕はやるべき」とした後Fクラスの教室でお茶を飲んでいた。

「ふう……」

お茶が美味しい……
やつぱりお茶は日本茶に限るな……

「お前は何してるんだ？」

そんな声がしたかと思い声がした方を向くとそこには秀吉や雄一や姫路さんや美波、そして隼人も僕のことをジト目で見ていた。

「隼人、これありがと」

そう言つて隼人に光の腕輪を投げ返す。
隼人はそれを取つて自分の腕に付けた。

「それで？お前は何をしているんだ？」

「日本茶飲んでる」

パコンツ！ザスツ！

「つぎやああああああつー曰が、曰があああああつー頭も痛いいい
いいつ！」

正直に言つたのにこの扱いは何だよ！

僕が何をしたんだ！

「お前は馬鹿か！Bクラスが攻めて来たらどうするんだ！」

「頭は良いのに何で行為は馬鹿なのよー。」

そう言いながら僕に更なる追撃をかけようとする美波と野獣。それを止めているのは隼人と秀吉。

「イタタ……大丈夫だよ、やるべきことはやったから」

目を押えながら僕はそう言った。

その言葉を聞いて皆は首を傾げている。

「吉井君、やるべきことと言つてほどのじつと言つことですか？」

「えへっとね……」

約一時間前

今は前線の部隊の部隊を倒した後。後残っているのは教室に居る部隊だけ。

「さてと……Bクラスの教室に乗り込むかな？」

僕はそう呟きながらBクラスへの教室へと歩き出した。

Bクラス教室

『吉井だ！打ち取れ！』

Bクラスの教室に入った瞬間そんな号令が聞こえたかと思つと一気にBクラスの皆の召喚獣が僕の召喚獣に襲い掛つた。

「遅い！」

光の腕輪が起動している限りフィールドは日本史になる。この学園において僕に日本史の点数で勝てる者は居ない。

『Fクラス 吉井明久 VS Bクラス 全員
日本史 2000点 VS 2000点』

今Bクラスで戦える人数が大体十人位だから一人200点位かな？いくら数で来ようが今の僕の状況は200点の人達と十回戦うだけ。そんなの苦ではない。

むしろ……楽しい位だ。

「さあ……かかってきなよ……遊んであげるから……」

『『『（ゾクツ！）』』』

時は戻りFクラス教室

「とまあ、そんな訳で根本君以外の戦力を補習室に送つて帰つて来

接問室

たよ

Dクラスに室外機を壊せたのが無駄になつたけどそこいら辺は許してくれると言じていふ。

「……鬼だな」

なんて失礼な。

「で？卑怯で下衆でこの世に存在しない方が良い奴ナンバーワンの

「まだ戦力はあるけど召喚獣を召喚される前に縄で縛つて気絶させたよ」

仮にもFクラス代表の雄一と話をさせた後に逃げられたらたまつた物じゃないからね。

と言うか雄二も人のこと言えないじゃないか。
さりげなく根本君を侮辱してゐるし。

「そうか、なら行くぞー！Bクラスの教室へとー！」

「…………！」

雄一の号令で僕たちはBクラスの教室へと向かうことになった。

それが……かつての『俺』を起こす結果に繋がる」とを……

九話　Bクラス戦（後編）

僕達はBクラスの教室に西村先生を連れて居る。そこに居たのは僕が縄で縛つた根本君。

「何で亀甲縛りなんだ？」

「そこには気にならないで」

後女子の三人（秀吉含む）は何で顔を赤らめないで。
「まあ、野郎が縛られてる所なんて見ても気持ち悪いだけだから解くぞ？」

そう言って隼人は根本君の縄を解く。
それより野郎が縛られてる所は気持ち悪いってことは女なら良いのかな？

「さて、根本恭一、お前に保健体育勝負を申し込む。
試^{サモン}獸^{モン}召^モ喚^ム」

「くそがああああつ！試^{サモン}獸^{モン}召^モ喚^ム！」

『Fクラス 桐岡隼人 VS Bクラス 根本恭一
保険体育 750点 VS 203点』

お互いの召喚獣が現れ点数が表示された瞬間隼人の召喚獣が根本君の召喚獣を斬り裂きBクラス戦は終結した。

……が

「てめえらああああつー絶対にゆるさねからなーまず最初に姫路ー！これが何だか分かるよなー！？」

「ー」

根本君が一枚の紙を出した瞬間姫路さんの表情が硬直した。まさかあれは……僕に告白した時の手紙！？落としたのを取られたのか！

「Fクラスを負けるようにしろって言つたのに無視しやがったなー！？」

こいつをコピーして学校中にばらまいてやるよー！」

こいつ……一姫路さんを脅迫しやがったのか……！

そう言つ思考に至つた時僕の……『俺の』何かが弾けた。

第三者視点

根本が『学校中にばらまいてやるよ』やつ言つて少しするとBクラスの教室内にとてつもない殺氣が放たれた。

その殺氣は負の感情全てを含んだ様な不快な殺氣。この殺氣を感じた時隼人は驚愕の表情を浮かべた。それは殺気に驚いた訳ではない。

いや確かに殺気に驚いたと言うのは事実だ。

隼人が驚いたのは殺氣を放つた人物だ。

「明久……？」

隼人が明久の方を向くと明久は俯いていた。
そして明久が顔を上げるとそこには『かつての明久』が本気で怒った時の顔があつた。

「根本くううううん、何てこと言つのかなああ？」

明久の顔は……笑顔。

だが、その笑顔は楽しい笑顔では無い。

狂気を纏つた笑顔だ。

その顔を見た瞬間根本は悟つた。

『俺は怒らせてはならない奴を怒らせた』と

明久はゆっくりと笑いながら根本に近づく。

誰も止められない。

雄二も、姫路も、島田も、土屋も、秀吉も、西村も隼人すらも全員止められない。

ただ嫌な汗を搔き明久を見ているだけだ。

見ていたくは無い。

でも、目をそらせられない。

あまりの圧力で顔すらも動かせないのだ。

「いけないことだよねえええ？脅迫って言つのはさああああ

「く、来るな！来ないでくれ！」

根本がそう言つても明久と根本の距離は少しづつ狭まっていく。
動けない。逃げたいのに逃げられない。

隼人はその光景を見て昔のこと思い出していた。

かつて明久は仲間に不良が手を出した時こんな風に怒っていた。

その時の不良は全員もうこの世には居ない。
このままではあの時の様になってしまつ。

その考えに至つた時明久は拳を振り上げていた。
それを見て隼人は動いた。

「はあっ！」

「ぐつ！」

隼人は明久を壁に吹き飛ばした。

常人ならば氣絶する程の拳。

だが明久が氣絶したことは無かつた。

「いつたいなあああ……隼人、何するんだよ？」

明久はゆっくりと立ち上がる。

その顔は今だ狂氣を纏つてゐるが先程よりも狂氣は薄くなつた。

「お前にこれ以上暴力を振わせる訳にはいかないんだよ」

隼人はそう言つて身を低くし一気に明久に近寄る。

狙いは人体の急所。

急所を狙つて短時間で決着を着けようとしているのだ。

だが、明久もそこまで甘くは無い。

一撃一撃を防御しながら反撃をする。

実力はほぼ同じだ。

だが、明久は怒りで冷静が出来ていない。

だから、隼人が生み出している隙があると気付かない。

「はあっ！」

明久は隼人がわざと生み出している隙を突く。

隼人はこれ待っていたのだ。

いつもの明久ならばこの隙は不自然だと気付く。
だが、冷静でない明久ならばこの隙を突く。

そう思つて隼人はわざと隙を作つた。

隼人は拳の勢いを使い一本背負いを使い明久を投げた。
明久を投げた後隼人は明久の鳩尾を殴つてようやく明久を氣絶させた。

「はあ……はあ……皆、明久を、保健室に、運ぶぞ」

隼人がそう言うと雄一達は頷いた。

隼人 side

保健室

「あれが昔のアキなの？」

保健室に明久を運んだ後少し落ち着いて島田はそう呟いた。
他の面子も俺を見ている。
俺は少し考えて答えた。

「あれは明久が本気でキレた時の明久だ。
あの明久を鎮めるには見た通り苦労する」

「 もう……」

その場に嫌な沈黙が流れる。
その沈黙がしばらく流れると

「んん……」

明久が気を取り戻したらしい。
明久は体を起して周りの様子を見る。
そしてこう言った。

「 ここはどこだ？ お前達は……誰だ？」

十話 二人の過去（前編）（前書き）

オリキヤラ紹介

今回出てくるオリキヤラを紹介します。

桐岡 佐波

隼人の姉。

医療に関することならば天才と言われ大病院桐岡病院の院長。
隼人が将来医者の道に進むことを期待しているが隼人は断つている。

幸崎 美冬

明久と隼人がロサンゼルスであった少女。
明久が不良から助けた。

十話 一人の過去（前編）

「ここは桐岡病院。

名前から察する通り俺の家が経営している病院だ。

明久が起きた後俺達はBクラスの外道代表と話を付けてここに来ていた。

「姉貴、どうだ？」

俺がそう尋ねたのは俺の姉貴『桐岡 佐波』

この病院の院長だ。

姉貴は動物と言われる類の物ならばどんな動物でも治せる医療の天才。

だから明久をここに連れて來た訳だ。

「あんた、予感はしてるんでしょ？」

「まさか……俺の勘は当たってるのか？」

俺の問いに姉貴は頷いて答えた。

「間違いないね。精神的な負担が来て記憶が欠落したんだよ」

「……」

精神的な負担と言えば……本気でキレたことが。

あれ以外に精神的な負担は考えられない。

「治す為にはやっぱり普通の生活を送らせた方が良いか？」

「そうだね。良い刺激を『えてあげるとポンッと思いつか』ことがあるから。

それと分かつてゐるよね？」

「ああ、姫路には言わない」

もし、姫路に言えば姫路は自分のことを責める筈だ。
そんなことを明久は望まない。

「それじゃな、姉貴」

俺はそう言つて扉を開けて部屋から出た。

「　　桐岡（君）――」

俺が部屋から出た瞬間坂本達が俺の周りに集まって來た。
それ程明久の診査結果が気になるんだろう。

「明久は普通の生活を送つて良いそうだ。
何か良い刺激を『えてやると良いらし』い」

俺はそう言しながら近くのソファに腰掛ける。
すると、坂本が言い難そうにこう言つて來た。

「明久の昔のこと」を教えてくれないか？」

「昔？中坊の頃のことか？」

坂本はその問い合わせに頷いて肯定する。

「……俺達は明久の昔のことを知らない」

「ムツツリーーの言つ通りなんだ。

姫路も小学校の頃を知つてゐけどあんな風になつたことは無いって
言つてる。

だから知りたいんだ」

「教えて、アキは中学生の頃はどんなだつたの？」

「教えてください」

四人の顔は至極真面目。

興味本位で聞いてゐる訳じやないと分かる。

「分かつた。少し長くなる、座れ」

俺がそう言うと四人共ソファに腰掛ける。

俺はそれを見て話始めた。

中学一年の頃のあの頃ことを……

隼人達が中二の頃ラスベガスのあるカジノ（日本語でお送りします）

「ロイヤルストレートフラッシュ」

俺はそう言って五枚のカードをその場に置く。
相手の顔が蒼白になつていいくのが分かる。

「ガキ！イカサマをしただらうー。」

そう言って相手は俺に指差してイチャモンを付けて来た。
これでもう十回負けてるからな。

イカサマだと言いたくなる気持ちは分からなくもない。
だが、眞面目にやつてゐこちらとしては言われたくないセリフだ。

「そりやつて言い訳をするのはやめてもらおう。
この結果は実力だ。そもそもこゝがどんな場所か分かっているだろ
う？」

実はこのカジノは裏カジノ。

イカサマをしたらその場で男だろうが女だろうが良く分からない場
所に連れて行かれる。

更にここのディーラーは特殊な訓練を受けたスペシャリスト。
イカサマをしたら絶対にバレる。

「ディーラー！このガキはイカサマをしてないのか！」

今度はディーラーに文句を言い始めたか。
どれだけ俺がイカサマをしたと思いたいんだ。

「していません、このお方は実力であなたに勝っています。
これ以上騒がれると他のお客様のご迷惑になりますので『特別処置』
を取らざるを得なくなりますのでご注意ください」

「つー。」

ディーラーが『特別処置』を取ると言つた瞬間男は静かになつた。
まあ、俺でも静かになるだらうな。

そんなことを思つていると

「隼人、どれ位稼いだ?」

そう言つて手に多くのコイン入れを持つて来たのは明久だ。
こいつもこいつで別のゲームで稼いでいた。

「これ位だ」

俺はそう言つて成果を見せる。

成果を見ると明久は感心して口笛を吹いた。

「もう良いだる。せつと出よ!ぜ」

明久はそう言つて出口へと向かつた。

その後俺達は出口近くで換金してカジノから出た。

ラスベガスの道

「じつかし、あのオッサンひるさかつたなー」

明久はそう言いながら金の入つているアタッシュケースを振りまわ
している。

……今、アタッシュケースが頭を掠めた。

「しょうがないだろ。あのオッサンはここいらでも有名な奴だつ
たからな。

それとお前、アタッシュケースを振りまわすのをやめろ。

当たり所が悪かつたら死ぬ

「あ、悪い」

そんなやり取りを取りながら俺達は歩く。

ここから宿泊先のホテルまでそんなに時間はかかるない。夕食までには帰れる筈だ。

そんなことを思つていると

「やめてくださいー（英語）」

そんな叫び声が聞こえて来た。

その声の方を向くとそこには一人の少女が五人の不良に絡まれている光景があった。

「はあ……ああいうの見ると不愉快だな……これちょっと見ててくれ」

明久はそう言つてアタッショニケースを置いて不良達の方に歩いて行く。

一分も待てば……

「このガキ覚えてろー（英語）」

とまあ、負け犬の出来上がりだ。

明久は絡まれていた少女を連れてこっちにやつて來た。

「隼人ーこの子日本人だつてよー」

あいつ……そんなことを大声で言わなくとも良いだろ(?)……

「えっと……助けてくれてありがとうございます。」

『幸崎 美冬』って言います（二郎）』

俺はその時、幸崎に対しても抱いた感情に気付かなかつた。

十一話 一人の過去（中編）（前書き）

十一話 一人の過去（中編）

「あー、そう言えば……」

自己紹介をして幸崎を家まで送つている途中明久が何かを思い出した様な顔をしてズボンのポケットを探り出した。

そして、メモ帳を取り出し何か書いて一ページ分を破り『お前も書け』と言いながら俺に渡した。

そこに書いてあつたのは明久のメールアドレスと電話番号だつた。俺は自分のメールアドレスと電話番号を書いて明久に渡す。

明久はそれを見て確認して幸崎に渡した。

「これ、俺と隼人のメールアドと電話番号だから良かつたら登録して」

「クスクスッ」

明久の言葉を聞いて幸崎は小さく笑つた。
まあ、しょうがないだろう。

「明久、そのセリフはナンパみたいだぞ」

俺は顔に手を当てて呆れながらそう言った。

そこで明久はようやく気付いたのか慌ててメモを引込めた。

「『めんごめん、 そうだったね』

だがそのメモを幸崎は明久から奪い取つた。

「登録しようと。今日は本当にありがとう。」

私の家ここだから

幸崎はそう言つて微笑んで家に入ろうとする。

明久はそれを呼びとめた。

「明日、ブロックエンイーグルスってチームの試合があるんだけど俺、
その試合に出るんだ！」

場所はここから一番近くの広場で時間は十時からだから！
良かつたら来てくれ！」

幸崎は微笑んで頷いてた。
それを見た明久は微笑んだ。

翌日

カキイイイツン！

そんな快音が鳴り響きボールが場外にまで飛んで行く。
バッターの明久はそれを見て一気に走る。

「あれ？ 桐岡君？」

そんな声が後から聞こえて後を向くと幸崎が意外そうな顔をして立
つていた。

「何だその『吉井君が出てるんだから桐岡君も出てると思つてたん
だけど？』と言いたそうな顔は」

「あーこー…当たつてるよー。」

あまつはしゃぐ」とでもないと思つんだが……

「それで? 何で出て無いの? 見た限り桐岡君も運動神経抜群だと思
うんだけど?」

「確かに野球は出来るがめんどくさいんだ」

明久から良く誘われているが余程の暇が無い限り誘いには乗らない。

「あははは～めんどくさいか～

そんな」と言つて吉井君は怒らないの?」

「その程度ではあいつはキれないわ」

明久をキレさせたいのならば余程のことをしなければならないだろ
う。

それ位あいつは優しい。

と、そんなことを思つていると

『ゲームセッター。』

ピッチャーの明久が敵チームの最後のバッターから三振を奪いゲー
ムを終了させた。

「吉井君す、いね～」

「あいつはプロ野球チームからスカウトを受けているんだ。

あれ位当たり前だろ?」

そのチームの名前は忘れたが相当有名な野球チームだつた様な気がする。

そんなことを思つてゐると着替えてきた明久がやつてきた。

「待たせて悪いな。帰ろ」
「ぜ」

「うん、勿論送つてくれるよね?」

「お嬢様の仰せのままに……」

明久は頭が良いくせに偶に馬鹿な行動を取る。

「じゃあ、行こうか!」

幸崎の命令(?)で俺達は歩き出した。

この日常が壊れる事件が近付いてゐるのに気付かないまま……

十一話 一人の過去（後編）（前書き）

思つたよりも早く投稿出来ました。
過去編終了です。
どうぞ～

十一話 一人の過去（後編）

俺達と幸崎が会つてから一ヶ月程が経つた。

俺は彼女と会つていらない間ずっと彼女のことを考えていた。

彼女の純粋な笑み、闇を知らない純粋な瞳、俺は彼女に惚れている。

最初に会つた時は気付かなかつたが最近になつて気付いた。だが……

「よつ……ほらよつ……っしゃああああつ！ラスボス倒したああああつ！」

彼女は明久に惚れている。

彼女が明久と話している時彼女の目が変わることに最近になつて気が付いた。

それを気付いたのが俺が自分が抱いている感情に気付いたのと同じ日だった。

「隼人ー…どうだ俺のゲームの腕は！」

明久はそう言いながらその場でクルクル回っている。あいつが何でそこまで喜ぶのか分からぬ。

「明久、お前、自分の好きな奴が親友のことを好きだつたらどうする？」

聞いてから俺はしまつたと思つた。

『何でそんなことを聞くんだ？』と聞かれたらどういえば良いのかを考えていなかつた。

だが、そんな心配をよそに明久はこう答えた。

「そうだな……俺の場合好きな奴を応援するかな？」

「諦められるのか？」

「好きな奴が幸せになれるなら良いさ。
え！？このゲーム裏ボスとか居るのか！？
攻略してやる！」

明久はそう言ってまたゲームに集中し始めた。
こいつのゲームに関する集中力は大したものだ。
そんなことを思つていると

『 ～～ ～ ～～ ……』

明久の携帯が鳴った。

明久はゲームに夢中で気付いていない。

「明久、携帯が鳴ったぞ」

そう言つて俺は明久に向かつて携帯を投げる。

明久はゲームを停止させて携帯を後ろ手でキャッチした。

明久は携帯を開いて操作し始めた。

メールを見ると明久はゲームの電源を切つて立ち上がつた。

「珍しいな、お前がセーブもせずにゲームを途中でやめるなんて」

俺が知る限り明久がセーブもせずにゲームを途中でやめることは無い。

途中でやめるにしてもセーブは必ずする。

晃久は出かける準備をしながら「うん」と答えた。

「美冬からの呼び出しだ。

何でも一人きりで会いたいらしい」

そう言つて明久は鍵を投げてきた。

「出かける時は戸締り頼むわ。

それじゃ」

明久はそう言つて片手を挙げて部屋を出た。

俺は少しじつとしていたが何故かそのままではいられなくなり部屋から出た。

鍵を閉めて明久を追つこととしたのだ。

「何でこんなことを……」

そう呟いても誰も答える人間は居ない。

ただ、その呟きは街の喧騒に消えるのみ。

そんなことを思つていると明久と幸崎が合流した。

すると二人は何かを話し始めた。

「ここからでは聞こえないな……」

俺はそう呟き一人にバレン様にゆっくりと近づく。するとよつやく一人の会話が聞こえ始めた。

『明久君、来ててくれてありがとう』

『別に良いって、それで用つて何んだ?』

明久がそう尋ねると幸崎は少し間を置いてこう言った。

『明久君……私ね……明久君のことが好きなの！私と付き合ってください！』

「「一」」

幸崎は明久に告白したんだ。

そう理解するのに十秒程かかった。

明久から『クールスープーパーコンピューター』とか言われている俺がだ。

分かつっていてもそれ位驚いた。

『それ……本気か？』

『うん』

そう返事をした幸崎の目は真剣な目だった。

それを見て俺は悟った。

彼女の意思是相当強く誰にも搖るがすることは出来ないと。

俺は固めることができた。

幸崎を諦め、二人を応援するという意思を固めることができた。

俺はこれ以上盗み聞きをしまいと思いその場から立ち去りつとする。

その時

『「めん……その思いは受け入れられない』

「「一」」

明久は幸崎の告白を断つた。

「どうがないだろう。

誰にでも人の告白を断る権利は存在する。
だから俺は明久を責めることは出来ない。
そう思ったその時

『そ、そつか』『ようがないよね』『あ、あれ?』

「つ！」

幸崎が涙を流したのだ。

いくら俺が冷静とは言え堪え切れないことがある。
好きな奴が涙を流せば冷静になれない。
その原因がたとえ……明久だったとしても。

「明久！お前女を泣かせるとはどう言つことだ！」

「隼人（君）！？」

俺は明久の胸倉を掴んだ。

明久と幸崎はまだ困惑している。
俺は本気で明久の頬を殴った。

「ぐはあつ！」

明久は俺に殴られながらも立ち上がった。

「隼人……いきなり何するんだ」

明久は俺に殴られたところを押えながらそう尋ねてきた。

俺はそう尋ねている間にも逃げて欲しかつた。
俺は明久を傷つけたく無かつた。

でも明久は逃げなかつた。

「ぐあっ！」

今度は明久の鳩尾を蹴つた。

何度も何度も明久を蹴つたり殴つたりしても明久は抵抗しなかつた

……

「その後俺は警察に捕まり厳重注意。

明久は全治五ヶ月の怪我を負い、

プロ野球チームからのスカウトは問題を起こしたと見られて中断された」

俺が話している間五人は静かに俺の話を聞いていた。

「俺は日本に帰国した後、冷静に考えたんだ。

どうして明久が告白を断つたのかをな」

「それってただその幸崎つて子以外に好きな人が居たんじゃ無かつたの？」

「……ありえたこと」

土屋と島田の言葉に俺は首を横に振つた。

「明久は公言こよしていなかつたが幸崎に好意を持つていた。
なのに明久は幸崎の告白を断つたんだ」

「ならどうしてですか？」

俺は姫路の言葉に少し間を置いてこう答えた。

「明久は俺の気持ちに気付いていたんだ。

俺とあいつは長いこと付き合つてたからな。

俺が幸崎に対し好意を持っていたことに気付いていたんだろう。
本来ならば明久が幸崎の告白を断つた時にその考えに至るべきだつ
たんだ。

なのに……なのに俺は……！明久の夢を奪つてしまつた……！

俺は流れる涙を止めようと手押えるがそれでも涙は止まらない。
俺はいつのまにこんなに泣き虫になつていていたのだろうか？

そう思う程涙が流れてくる。

俺は涙を拭いつつ言った。

「許されるとは思つていない。
だけど、俺は許されたいんだ。
また、あいつと昔の様な楽しい生活を送りたいんだ」

俺はそう言しながら立ち上がりゆきくつと出口に向かつ。

「俺はもう帰る。明日な」

俺はそう言って家路についた。

十三話 Aクラスへの宣戦布告（前書き）

日本国憲法第76条『裁判官の職権の独立』について以下の（ ）にあてはまる語句を記入しなさい。

『全ての裁判官はその（ ）に従ひ（ ）してその（ ）を行ひ、

この（ ）及び（ ）にのみ拘束される』

吉井明久・姫路瑞希・桐岡隼人の解答

『全ての裁判官はその（良心）に従ひ（独立）してその（職権）を行ひ、
この（憲法）及び（法律）にのみ拘束される』

教師のコメント

大変良く出来ました。

吉井君もやれば出来る子だつたんですね。
これから吉井君に期待します。

坂本雄一の解答

『全ての裁判官はその（明久の解答）に従ひ（明久の解答）してその（明久の解答）を行いひ、この（明久の解答）及び（明久の解答）にのみ拘束される』

教師のコメント

君にこなせ期待しないことになります。

土屋康太の解答

『全ての裁判官はその（本能）に従ひ（脱衣）してその（全裸体操）を行ひ、この（現行犯により警察の手）及び（手錠）にのみ拘束される』

教師のコメント

全ての裁判官の皆様に誠意ある謝罪文を要求します。

十三話 Aクラスへの宣戦布告

小説本文 明久の見舞いに行つた翌日。

俺は学園長室の前に来ていた。

ここに来たのは学園長とある話をする為だ。

俺は少し息を整えて扉を叩いた。

コンコン

「失礼する」

俺はそう言つて返事も待たずに学園長室に入る。

「誰だい礼儀知らずの……何だあんたかい」

忘れている奴も居るかも知れないが俺の祖父はこのババアと知り合いで良くこのババアは図々しく

『知り合いなら協力しな』と言つて召喚獣のデータ採取の為に良く協力させられていた。

因みに明久も同様だ。

「話があるが……少し待つてろ」

俺はそう言つてポケットに入れて球体状の機会を取り出す。

俺はその機会のスイッチを入れた。

すると

キュー——ン……

そんな電子音が鳴った。

ババアは耳を塞いでいる。

「何だいその耳障りな音は……」

俺は機会をズボンのポケットに入れながら答えた。

「特別な電波を飛ばす装置だ。

半径百メートル以内の電子機器はこの装置が作動している間使えないくなる

俺はソファに座りながら話を続ける。

何だか俺が悪役の気分だ。

「お前、最近白金の腕輪とか言つ物を作つているらしいな」

「何でそれを！」

ババアは驚愕の表情で俺を見ている。

「本社の情報部の情報網をなめるな」

本社の情報部は政治家の不正の証拠の隠し場所やこの二年の海外の要人の来日日程、

更には世界の企業が五年間の内に出そつとしている商品の情報等も把握している。

学園長の隠し事等調べなくとも入つて来ることだ。

「その腕輪にはどうしても直せない欠陥もある様だな」

「そこまで知つてんのかい……それで私を強請りついでかい？」

俺はその質問に首を振る。

「そう言つ訳じやない。

ただ、取引をしたいだけだ」

「何だつて？」

がくえ ババアが訝しむのは無理もないだろう。

そもそも今、俺はババアを強請れる立場にあるのに俺はそれをしないんだから。

「Aクラス戦で設備だけではなくあるものが欲しい。
そこで俺達がそれを得るのを了承して欲しいんだ。
了承すれば本社の全設備を使ってその欠陥を直してやる」

ババアはそこで少し思案顔になつてこう尋ねてきた。

「分かつたさね、何が欲しいんだい？」

「俺が欲しいのは……」

Aクラス教室

「一騎打ち?」

ババアと取引が終わった後俺達はAクラスの教室に来ていた。

ババアと長く話し過ぎた所為でAクラスへの宣戦布告の時間を過ぎたから坂本が心配して電話をかけてきたのだ。

因みに携帯番号は明久の携帯を見たらしい。

「そりだFクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

今回の宣戦布告ではクラス代表の坂本、俺、姫路、明久、土屋、木下と首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

明久は記憶喪失なのに來ても良かつたのか?
因み対応しているのは木下の姉だ。

「何が狙いなの?」

「Fクラスの勝利以外何も無い」

そう言つても信じられないのは当然だろつ。

下位クラスの俺達が学年主席の霧島に勝負を挑むと言つのはおかしな話だ。

それに一騎打ちに俺や姫路が出たらほぼ勝てるだろつ。
ここは助けてやるか……

「一騎打ちは五回。三回勝つた方の勝ちならばお前達にも問題はあるまい?」

「桐岡!?」

「坂本、少し黙つてろ。」

教科の選択権はやがて全でやられた。

こちには勝てる要素が山ほどあるからな

「やつおじふー。」

いい加減いひゆるで鳩尾に一発拳を入れてやった。

うわしたこというなると言つことを少しほんかつてくれただろつか？

「……受けても良こ

「一。」

今のは流石の俺も少し驚いた。

全く気配を感じさせないとは……ここつは武芸の達人ではないのか？

「代表、良いの？」

木下（姉）の問いかに頷きながら霧島まゝづつて來た。

「その代り負けた方は勝つた方のことを聞くべく

「…………（かぢやかぢや）」

土屋は何をしてくるんだ？

「分かった、勝負は十時からで良いな？」

「…………うん」

不思議な雰囲気を持つてゐる奴だ。

「明久、教科書は全教科読んでおけよ」

「分かつてるので。さつき試してみたけど瞬間記憶能力はまだ消えて無いからな」

それは良い報告だ。

「お前等、戻るぞ」

俺達はFクラスの生徒に報告する為に教室に戻った。

十四話 AクラスVSFクラス

Aクラス対Fクラスの開戦時間に俺達はAクラスの教室に居た。Aクラスの方が広いからこちらで戦うことになった。

「では、両名共準備は良いですか？」

立会人はここ数日で世話になつた学年主任の高橋だ。あの女、実は少し抜けている所があると噂があるがあんな見た目ではそんなことはないと思う。

「ああ」

「……問題ない」

両クラスのクラス代表がそう答えたことにより最初に戦う生徒が前に出る。

あれは……木下の姉か。

それに対してもちらりが出るのは

「ワシが出よ」

その弟の木下秀吉か。

馬鹿め。ここで木下が出れば

「とにかく、秀吉、Cクラスの小山さんって知ってる?」

やつぱりさうきたか……

「はて、誰じゃ？」

しらを切つたところで誤魔化せる訳がないだろ？が……

「じゃあ、良いや。ちょっとひつち来て」

「ん？ 姉上、ワシを廊下に連れ出してどうさんじや？」

木下（姉）は木下（弟）の腕を引っ張つて廊下に連れ出した。

『姉上、勝負は どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、このクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがこのクラスの人達を豚呼ばわりしたことになってるのかなあ？』

『はつはつは。それはじやな、姉上の本性をワシなりに推測して
あ、姉上っ！ ちがっ……！ その関節はそっちには曲がらな
つ……！』

ガラガラガラ

扉を開けて木下（姉）が帰つて來た。

わいば木下（弟）よ……お前のことは忘れない。

「秀吉は急用ができたから帰るつてさう。代わりの人を出してくれる？」

「い、いや……ウチの不戦敗で良い……」

にこやかに笑いながらハンカチで血を拭う木下（姉）

木下（弟）には同情しよう。

「さうですか。それではまずはAクラスが一勝、と」

軽過ぎる……軽過ぎるわ……

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉
生命活動 WIN VS DEAD』

まだ生きてるぞ。

ただ、死にかけているだけだ。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

物理か……理系だから俺が出た方が良いな。

坂本も俺を見ているし。

「俺が出よう」

俺はそう言つて前に出る。

すると高橋は頷きフィールドを出した。

「「試験召喚」」

幾何学的な魔方陣が現れお互いの召喚獣が姿を現し点数が表示される。

『Aクラス 佐藤美穂

物理 389点

Aクラス内でも優秀な点数だろつ。

まあ、得意科目を持つて来ただろつから点数が高いのは当たり前か。だが……

「理系が得意なのは俺も同じだ」

『Fクラス 桐岡隼人
物理 2000点』

『『『はあっ！？2000！？』』』

Aクラスから驚愕の声が聞こえる。

まあ、チートだからな。

「さて、さつさと終わらせようか

俺はそう言つて召喚獣にマシンガンを構えさせる。

召喚獣は引き金を引いて弾を発射させた。

パパパパパパッ！

「つ！」

かわしたか。

まあ、遠距離タイプの装備は複数の敵を倒す時の装備だからしあうがないな。

そんなことを思いながら召喚獣にマシンガンを捨てさせ刀を構えさせる。

そして、一気に距離を詰めさせる。

相手は間合いに入つたことで武器を振つて来た。

そこで俺はその武器に向かい刀を振わせる。

すると

バキンッ！

「なつ！」

相手の武器が砕け相手が動搖する。

相手が動搖した隙を突いて相手の召喚獣を切り裂かせた。

『Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 桐岡隼人
物理 DEAD VS WIN』

「勝者Fクラス」

俺はその言葉を聞きながら先程まで俺が居た場所に戻る。
さて、次は誰だ？

「三人目の方、どうぞ」

高橋にそう言われ土屋が立ちあがつた。

失敗したな。ここでもし、対戦教科が保健体育でなかつたらこちら
が負ける。

「じゃあ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは緑色の髪をショートカットにしたボーアイッシュな女
子が出てきた。

一年の終わりに俺のクラスに来た工藤愛子じゃないか。

「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。一応言ひとムツツリ
——君の知り合いだよ」

工藤が自己紹介を終えると高橋が工藤に尋ねた。

「保健体育でお願いします」

ああ、工藤は転校生だから土屋が保健体育が得意なのを知らないんだつたな。
だが、何だらう、この嫌な予感は……

「ムツツリー——君は知ってるよね？ボクも保健体育が得意だつて。
ムツツリー——君とは違つて……実技でね」

「（ふしゃああああああああっ！）」

土屋が勢い良く鼻血を噴き出した。

いつもより量が多くつたような気がする。

「あははは——ムツツリー——君、ごめんね。
……ムツツリー——君？」

土屋は鼻血を噴き出してから動かなくなつていった。
俺は土屋の近くまで歩き脈を見る。

そして、教師の前だが構わず携帯を開き姉貴の携帯に電話する。

プルプルプル……

『あ、隼人？今、学校中でしょ？ビリしたの？』

「姉貴、今すぐ学園に救急車を寄こしてくれ。

俺のクラスメイトが血を出し過ぎてまづい状況なんだ。一応、保健室に行かせる」

『分かった。少し待つてな』

ピッ

電話が切れて俺は一言。

「土屋を保健室に運んでくる」

俺は土屋を持って保健室に向かった。

途中、工藤が付いて来て何でも看病するらことを言つてきた。

保健室から帰つて来た俺が見たのは姫路の召喚獣が相手の召喚獣を切り裂いている光景だった。

「明久、姫路の相手は？」

「何でも学年次席らしいぞ」

「学年次席に勝つとは……」

「姫路もやるな……」

「なあ、隼人」

「何だ？」

俺がそう聞くと明久は自分の方から呼んで来たくせに何だか言い難い顔になつていった。

「どうした？何を言われても怒らないから言ってみろ」「ひう

俺がそう言つと明久は覚悟を決めたようにこう言つて來た。

「俺、本当は記憶喪失になつてなかつたんだ」

「……は？」

「こいつは今何と言つた？

記憶喪失になつてなかつた？

この野郎……！」

「隼人！怒らないって言つたよな！？」

「……そうだつたな」

俺は明久に指摘され構えていた拳を引込める。危うく明久を殴り殺しそうになるところだった。

「それで？何で記憶喪失だつたふりをしたんだ？」

「記憶喪失だつたらお前とまた仲良くなれるだろ？」

「お前……」

「でも、やつぱつ何だか違う感じがしてよ。

いつまつのはやつぱり真正面から解決した方が良いと思つたんだ」

やつぱりこつね……

「全然変わつて無いな」

そう、昔から全然変わつて無い。
こつねは昔のままだ。

「やつぱりお前と俺はまた昔の様に『教科は日本史、内容は小学生
レベルで方程式は五点満点の上限ありだ!』……」

小学生レベルだと!?

そんなの百点確実……いや! 僕達が負ける!

「明久! 坂本を氣絶させるだ!」

「はー? 何でだよ!」

「日本史は記憶教科だぞ! 勉強しなければ忘れて点数が下がる教科
だ!」

小学生の頃神童だと言われていたとしても中学生の頃に悪鬼羅刹と言われていた男が勉強していたと思つか!?

「あ、やつべ……走るだ!」

今の状況は「一対一」の同点。

坂本が負ければ俺達の負けだ。

中学の頃真面目に勉強していなかつた坂本に勝ち田等絶対にない。

「「坂本（雄一）一氣絶しうおおおおおおつー」

「なー? お前等何を」「ふつーぐはあつー」

まず、俺が坂本の鳩尾に一発、明久は俺と坂本を飛び越え坂本の首に手刀をくらわせた。

そして、坂本が倒れたのを確認して俺はいつ言った。

「「から側の生徒が倒れてしまつたので」「からは代わりを出でやつ。明久、任せられるか?」

「了解! 任せてくれ」

俺は気絶した坂本を背負いながらEクラスの集団の中に近付き坂本を置く。

すると姫路がいつ尋ねてきた。

「何で坂本君を気絶させたんですか?」

「いつ、気付いて無かつたのか?
島田も気付いてない様だし……はあ……」

「日本史は記憶教科だぞ。勉強しなければ忘れて点数が下がる教科だ。」

小学生の頃神童だと言われていたとしても中学生の頃に悪鬼羅刹と言われていた男が勉強していたと

思つか?」

「「あ」」

「あのままやつてれば俺達が負けていた。
だから、俺達は坂本を氣絶させたんだ」

俺はそう言いながらディスプレイを見る。
すると、そこにはある一問が浮かびだされていた。

『（　　）年 大化の革新』

『『『うおおおおおおおつー』』』

教室を揺るがす様な歓喜の声。

一体何が起こったんだ?

俺が困惑していると姫路が説明をしてくれた。

「坂本君は昔大化の革新の年号を625年と嘘を教えたそつなんです。」

だから、この問題が出たら絶対に勝てるって言つてたんです!」

ほう……そんなことをしていたのか。

何と言つか……坂本は酷い奴だな。

まあ、それでも俺達が勝てるなら良いだろ。

そんなことを思つている間にもテストは終わりディスプレイの表示
が変わった。

『Aクラス 霧島翔子 97点』

その点数が表示された瞬間Aクラス全員が驚愕の表情を浮かべたのが分かつた。

さて、明久、お前の本気を見せてやれ。

『Fクラス 吉井明久 100』

『『『うおおおおおおおおつー!』』』

教室を揺るがす様な歓声の声。

明久がAクラスの教室に入つて來た。

俺は明久に駆け寄り

バチンッ!

お互いの手を叩きあつた。
お互いの表情は笑顔だった。

十四話 Aクラス▽SFクラス（後書き）

何か苦労なくAクラスを倒しちゃいました。見せ場が無くてごめんなさい……

十五話 Aクラス戦後

Aクラス戦が終わった後俺達は戦後対談をしていた。
Aクラスのほとんどの生徒はうなだれている。
学力最低クラスに負けたのだからそれは当然だひつ。

「さて、交渉を始めようか

「待て、坂本」

俺はゆっくりと先程復活した坂本に近づく。
因みに氣絶させた理由を説明したら許してくれた。

「桐岡、どうしたんだ？」

俺は教室の入り口を見る。
やつぱり居た……

「ババア、言つ通りにしてもらひつからな

「分かつてゐよ……クソジャリのクセに」

最後の言葉は聞き逃してやるつ。
一々つっこでると面倒だからな。

「あー妖怪ババア長！本当に学園長だったのかー！」

「やかましいよーーの不良のクソジャリー！」

「何だと…？」の見る耐えないババアが！

「うぬやこわねー？」のナシババアが！

「何だと…？」の見る堪えない異臭を放つクソババアが！

「うぬやこわねー？」のナシババアが！

「何だと…？」のナシババアが！

やれやれ……この二人は相変わらずだな……

「あの桐岡君、明久君は学園長と仲が悪いんですか？」

「と言づかアキは記憶喪失なんじゃないの？」

一気に尋ねやがって……

まあ、答えてやるか。

「まず、姫路の質問だが相当悪い。ババアの性格の所為でな。

次に島田の質問だが明久は俺と仲直りする為に記憶喪失を装つてたらしく。

あいつは全然変わつて無かつたよ

ババアと明久の喧嘩を見ながらそう言った。

あの一人はお互いを見た瞬間に喧嘩をするからなあ……

「やれやれ。そろそろ止めるか」

そろそろお互いの罵倒が聞くに耐えない物になつてきたからな。

「おい、明久、ババア、さつさと喧嘩をやめろ。
話が進まなくなるだらうが」

「ああ、悪い悪い」

「ふんつ！」

「やれやれ……ババア、本当に『AクラスとFクラスの併合』を行してくれるんだろうな？」

「『ええつ！？』」「

いたる所から驚愕の声があがる。
まあ、それは当たり前だらうな。

因みに明久は納得したような表情を浮かべている。

「俺達はこの戦争に勝つてAクラスの設備を手に入れる。
他のクラスはその設備を手に入れようとするだらう。
だが、俺達はFクラス、つまり学力最低クラスだ。
Aクラスが設備を取り戻しに来たら苦戦する。
だからこそ併合だ」

「併合すれば取り戻すことなんて絶対にないからな。

流石隼人、クールスーコンピューターは一味違うな

「誰がクールスーコンピューターだ。

ババア、教室の拡張工事は本社がやってやる。

人数分の設備も本社が用意してやる

俺はそう言ひながら携帯を開く。

「俺だ、始める」

『はつー。』

携帯の相手がそう答えた瞬間Aクラスの教室の扉が開き黒いスースを着た男達が入って来た。

「紹介しよう。俺の祖父の会社の建築課のHワート達だ。
お前達！頼むぞ！」

「」「お任せください」「

「と云つて詰だ。今日は適当に解散で良いだろ？』

「良いさね、それじゃあ『今日は解散だ！』セリフを取るんじゃな
いよクソジャリ！」

「あー!? などとー..」

やれやれ……

懲りない奴等だ……

「明久、少し付き合え」

「あーああ、分かったよ」

「坂本、島田、姫路、土屋、木下、お前達も着いてこい」

ここ等には……見届ける権利がある。

「分かつたが『」に行くんだ？」

「すぐ近くだ」

目的地に向かう間俺は何を聞かれても『すぐに分かる』としか答えなかつた。

学園近くの廃ビルのある一フロア

「隼人、ここは一体どこなんだい？」（口調は来る途中に戻った）

そう俺に尋ねながら明久は辺りを見回している。
俺は質問には答えずフロアの中心に向かつて歩いている。

「明久、俺はお前と同じく昔の様にやれたらと思つてこる。
だが、俺達の間には何か蟻りがある。

今日、それを無くしたいんだ」

その言葉で明久は理解したのか拳を固め始めた。
そうだ、明久。

「それで良いんだ」

俺はゆつくりと拳を固め構えた。

「皆、見届けて。

僕達の物語を……」

「明久！頑張つて來い！」

「アキ！頑張りなさいよ！」

「……頑張れ、明久……！」

「明久、頑張るのじゃぞ！」

三人の応援を聞いて明久はゆっくりと近づいてくる。

「待たせたな、隼人」

「準備は良いな？」

「ああ、行くぞ！隼人！」

「かかつてこい！明久！」

お互いがお互いに向かつて走った。

十六話 明久VS隼人（前書き）

今回バカテストはお休みです。

十六話 明久VS隼人

第三者視点

「はあっ！」

先手を取つたのは明久。
明久の最初の攻撃は右ストレート。

「甘い！」

隼人はそれをガードし右手で明久の鳩尾を狙う。
明久はそれを右に飛んで回避し隼人の脇腹を足で狙う。

「ふつ！」

隼人は少し後ろ下がりそれをかわし足が過ぎたところで明久との距離を詰め、明久の左頬を狙う。
明久はそれを左手で防御した。

「顔は狙うなよ」

明久が悪戯っぽい笑みを浮かべると隼人はこう返す。

「これは勝負だぞ？」

隼人がそう言つた瞬間二人はお互に下がり距離を取る。
そしてしばらく沈黙が流れ風が吹いたお互に距離を詰める。
今度は隼人が先手を取つた。

回転し裏拳をする。

明久はそれを屈んでかわしながら通り過ぎた拳を見る。

「つ！」

明久は嫌な予感がして後に下がると先程まで自分が居た場所に隼人の足があつた。

「危な……」

「加減位して。死にはしないから安心しろ」

「もし、避け無かつたらどうなつたんだよ」

それを笑顔で聞く辺り明久は怒っていない。
ただ単に面白がっているだけだ。

この決闘を、隼人とは本当に久しぶりに戦う。
だから、その最中に怒つて決闘を白けさせるようなことはしたくな
い。

「さあな、俺にも分からない」

隼人がそう言つた瞬間明久は隼人ととの距離を詰めて左の拳で隼人
を殴ろうとする。

隼人はそれをかわし下がる。

「お前……！今左で殴つただろ」

明久の左腕は規格外に威力と強度が高い。

かつて明久はトラックにひかれたことがある。

その時明久は左からひかれたのだが左腕には全くの損傷がなかつた。

「かわしただろ？俺も加減してたし」

「ふつ、お前がそう来るならば俺はこつだ」

そう言つて隼人は微笑むと明久との距離を詰め肩口、脇の下、モモ、脛と言つた急所を狙い始める。

これが隼人の戦い方。

隼人の武器は敵の急所を正確に狙う正確無比な拳。隼人は余程の事が無い限り急所を外さない。

と言つても明久はその拳を普通にかわして見せる。

「おま、ホント、危ないだろ！」

「一トンの威力を持つた拳で殴った奴が言うな」

「お前だつてかわした……だろ！」

そう言つて今度は右手で殴る明久。

隼人はそれを読んでいたのか何の苦もなくかわして見せる。

「明久、俺はな幸崎に惚れていた」

「ああ、知ってる」

「お前が幸崎に告白された時俺はそれを応援しようと思つた」

「そつか、それで？」

「なのにお前が幸崎を振つて許せなかつた。

俺が手に入れられなかつたものをお前は手に入れられるのに何でそれを拒絕したんだ、と」

「……」

「怒つた理由はそれだけだつたんだよ。

幸崎を泣かせたつて言う理由はただの建て前だ。
そんなことで俺はお前の夢を奪つたんだ」

明久はそれを聞きながら隼人の拳を受けている。
今度は明久が口を開いた。

「俺は隼人の気持ちに気付いてた。確かに多少は幸崎に対して好意を持つてた
でも、俺はもつと前から好きな人が居たんだよ」

「姫路か……」

「ああ、だから、俺は幸崎を振つたんだ」

「そうか……明久、俺を許してくれ」

「そつちが先だ」

「そつちだ」

「そつちだつての」

「そつちだ」

「むう……強情な奴め」

「なら同時にしよう」

「アリだな」

お互いに拳を振るうのをやめてお互いを見る。
そしてお互いに領き合ひこうと言ふと合つた。

「許すー。」「

こうして一人はお互いに許し合つたのだった。

十七話 明久VS隼人後

「いや～危なかつたな～後もう少しで死ぬところだつたぜ～」

明久は酔っ払いのテンションでそう言いながら俺の背中を叩いてくる。

ちょっとだけだがウザい。

「俺も危なかつたぞ。お前が左で殴つて来たからな」

あの決闘の後俺達は家に帰つてファミレスで打ち上げをしていた。

「何でアキの口調は俺口調になつてるの？」

「それは俺も気になるな。明久、何故だ？」

「え～？こっちが本当の俺だからさ。
元に戻そつと思つてな」

「ちゃんと考へてたんだな……」

格好付ける為とか答えるんじやないかと思つてたんだが。

「隼人、今失礼なこと考えてなかつたか？」

「思つてる訳がないだろ～」

相変わらず鋭い奴だ。

「と言うか格好付けたいだけだろ？」

「おー、馬鹿、坂本ー。」

「何と言つ死亡」「フラグを……！」

「ふつー。」

「うふつー。」

……坂本、右であつただけ良かつたと思へよ……

「しかし、明久」

「ん？」

俺は明久にしか聞こえない声で尋ねた。

「お前、いつになつたら姫路こ~~西日本~~あるんだ？」

「ふつー、げほげほ……お前何て」と~~思つて~~やがるんだー。」

「分かつてゐるだろ？姫路の気持ちを……」

「ああ、ちやんと分かつてゐよ。」

だから、今日の歸つ道に生じてひ迷つてやがるんだー。」

そこまで言つて明久は俺から顔を離す。
そろそろ座しまれるからな……

「さて、今日はもう帰るか。」

会計は明久の奢りでな

「はあ？」二は金持ちの隼人持ちだろ？」

「打ち上げを提案したのはお前だろ？」

「「…………」（ガンのくれ合い）」

俺達がガンのくれ合いをしていると姫路が恐る恐る提案してきた。

「あのぉ…………」二は割り勘で……」

「姫路！提案した者が一人で全て払うのが相場だ！」

「姫路さん！お金を持つてる人が全て払うのが相場なんだよ！」

「「…………」（メンチの切り合二）」

考えろ……金を払わないようにするには……
そうだ！先に出れば良いんだ！

「「ちよつとトイレ」「」

ちつ！明久も同じことを考えていたか！二は……

「死ねえ！明久／隼人！！」

ガンッ！（拳と拳がぶつかり合う音）

ガツ！（足と足がぶつかり合う音）

ちつ！一瞬で決着を付け損ねた！
流石明久だ！

「明久、周り客に迷惑になる。
ここは割り勘にしようじゃないか」

俺はそう言って手を差し出す。

「そうだね」

明久もそう言って俺同様に手を差し出し俺の手を握り……

「ふんっ！」

お互に思いつきり力を込めた。

「明久、諦めてお前が払うと言つのなら離しても良いぞ？」

「それはこっちのセリフだよ、隼人」

左では無いとは言え流石は明久。
とんでもない力だが俺も負けてはいない。

「ぐつーぐつー！」

少しきつくなってきたな……
だが、負ける訳には……！

「桐岡君！明久君！」

俺達を呼ぶ声が聞こえて來た。
この声は……まさか！

「幸崎！？」

俺達の再会は突然だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4289y/>

バカと少年とドタバタ生活

2012年1月8日21時00分発行